歴史を物語る名所

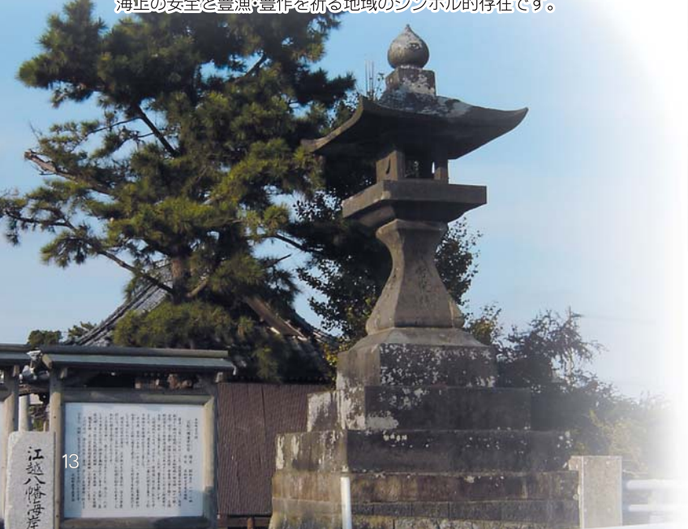
市内には、あちこちに柳川の歴史を物語る史跡が残されています。
文化的価値の高い貴重な文化財や地域で大事にされてきた場所など、それぞれ性格は違いますが、いずれも柳川の長い歴史の1ページに名を刻む大切な財産です。

柳川の碑　中町（MAP 2-㉞）

柳川の地名発祥の碑。
一説によると、音楽寺（現在の中町八剣神社）裏の川をかつて柳川といい、それが地名の由来になったといわれています。ただし、地名の由来については他にもいくつかの説があり、どれが本当かははっきり分かっていません。
なお、現在の八剣神社境内には、乃木希典大将が柳川を訪れた時に作ったという漢詩の碑や松尾芭蕉の句碑「桜塚」もあります。

慶長本土居跡と江越八幡海岸灯台　（MAP 1-⑭）

約400年前、田中吉政が現在の大川市新田からみやま市高田町渡瀬まで有明海沿岸に築いた防潮用堤防跡で、総延長32kmにも及び、領内整備に力を入れていたことが窺える史跡です。
また、江越八幡海岸灯台は慶長本土居上に築かれた灯台として使われていたものですが、その後、近くに鷹尾神社の分社として江越八幡宮を建立し、その常夜灯として用いられるようになりました。現在でも、海上の安全と豊漁・豊作を祈る地域のシンボル的存在です。



三嶋神社と肥前鳥居　西蒲池（MAP 1-⑫）

天治2（1125）年に勧請といわれる古い神社ですが、境内に当時の建物などは残されていません。
ただ、参道から西方約200mのところに孤立して立つ石造の鳥居は、筑後地方における肥前型鳥居の典型例として貴重なものです。
鳥居の刻字によると、この鳥居は元和元（1615）年柳川城主田中忠政の寄進によるものであり、この神社が当時の藩主からも大事にされていたことが分かります。

因福寺の石造物

大和町鷹ノ尾（MAP 1-⑬）

鷹ノ尾の因福寺には、多くの貴重な石造物が残されています。
境内に入ってすぐ左にある六地蔵は、南筑後平野に分布する丸彫式の典型的な六地蔵塔で、鷹尾城主田尻親種の次男大助が、天正5（1577）年に親種の子大安のために造った供養塔と伝えられているものです。
また、同じく境内にある宝篋印塔（ほうきょういんとう）は、室町前期ごろ玉州和尚が寺を開山再興した時に造立されたものといわれており、このあたりで最も古い石造物のひとつと考えられます。

地福寺の石造物　三橋町高畑（MAP 1-⑮）

高畑の地福寺には、いろいろな仏像や石造物が残されていますが、蒲池氏と縁のあるものが多いようです。
戦国時代のものとしては、作られた当時の形で残されている希少な六地蔵の石塔や宝篋印塔、また、欠落した部分も多いが、阿弥陀如来を中心に八体の仏様と蓮台が刻まれている板碑など、歴史を物語る貴重な史跡が残っています。

柳川城外曲輪（そとくるわ）土居　新町～今古賀（MAP 2-㉟）

この土居は、新町から今古賀の塩塚川まで続く、柳川城の一番外側の土塁跡です。柳川城に関する遺跡は現存するものが少なく、貴重な跡といえます。土居の上には樹木がうっそうと茂っていますが、これは土居の固めと視界を遮断する役割を持ち、意図的に植栽されたものです。一部は削られたり、樹木を伐採されたりしていますが、東部は江戸時代当時の姿を留めています。

磯鳥堰　三橋町磯鳥（MAP 1-⑯）

沖端川の磯鳥堰は、昭代や大川市新田の農業用水を取水するための堰です。
もともとは元禄年間（1688～1703）に作られたといわれる堰で、満潮時にはここまで海水があがってきて、淡水と混じりあう場所でもあります。有明海の干満の差を感じることができます。

萩の記念碑

三橋町百町（MAP 1-⑰）

新村の長橋や二ツ川水門付近は、古くから「月の名所」として知られていましたが、柳川藩主・立花鑑寛が堤防の固めと人の心の慰めにもなるからと、川の両岸にたくさんの萩を植えたため、多くの人々が花の盛りを見に来るようにもなり、当地に「萩の記念碑」が建てられました。このような由緒あるところも、堤防の改修によって碑が外され、その存在も忘れられかけていたため、文化協会で掃除・整地をされ、現在の位置に記念碑が移されています。
「清流と月と萩」の名所として大切な場所です。

米多比隅（めたみずみ）　奥州町（MAP 2-㊱）

旧柳川藩士・米多比氏の旧屋敷の隅にあった昔の防塁跡で、樹木の鬱蒼とした様は、江戸時代当時の景観をそのまま残しています。
また、このあたりの堀は町中の内堀と比べて広々としており、往時の城堀の雰囲気が残っているところでもあります。

二ツ川水門　三橋町百町（MAP 1-⑱）

二ツ川水門は、沖端川の水を二ツ川へ引き込む水門で、その起源ははっきりしませんが、柳川城築城と関係が深いといわれ、現在も昔と同じ姿で二ツ川の流れを支えています。昔から、柳川地方の水田の水や灌漑用水はこの水門から取水され、飲み水も洗濯もこの水に頼っていました。今でも柳川市内の水田を潤し、川下りにも利用されている城下町の掘割を巡っているのは、ここから取水された水です。まさに柳川にとっての命の水門です。